

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 第12回 全国大会プログラム

日時： 2012年11月17日(土) 9:30～17:50
場所： 中央大学駿河台記念館
〒101-8324 東京都千代田区神田駿河台3-11-5
TEL: 03-3292-3111 (記念館事務室)
(JR中央・総武線 御茶ノ水駅下車 徒歩3分)

★研究発表 (9:30～11:55)

第一室 (320号室)

司会 青山学院大学 田中 裕介

1. *Armada* における語りの特異性とジェンダー・イデオロギー (9:30～10:15)

東京大学大学院 大橋 千暁

2. 聖書史観の解体——Thomas Hardy とヴィクトリア朝の文学 (10:20～11:05)

立教大学大学院 唐戸 信嘉

3. 1850年代における“sensation” ——*Blackwood's Edinburgh Magazine* の記事を通して (11:10～11:55)

関西外国語大学 橋野 朋子

第二室 (330号室)

司会 中央大学 見市 雅俊

1. John Ruskin のエコロジー思想——『19世紀の嵐雲』を読む (9:30～10:15)

日本女子大学大学院 花角 聡美

2. 19世紀後半イギリスの大辞書・大事典の世界——南方熊楠を切り口として (10:20～11:05)

京都外国語大学(非) 志村 真幸

3. 自転車向けロードブックと自転車旅行記の出現と発展 (11:10～11:55) 奈良大学(非) 坂元 正樹

★総会 (2階、13:00～13:30)

司会 福島大学 辻みどり

★シンポジウム (2階、13:40～16:30)

海の歴史とヴィクトリア時代

司会	京都大学	小関 隆
モデレーター	京都大学	金澤 周作
パネリスト	大阪経済大学	坂本 優一郎
	日本学術振興会特別研究員	石橋 悠人
	京都大学	合田 昌史

★特別講演 (2階、16:40～17:50)

ヴィクトリア時代と《猥褻》の概念——『わが秘密の生涯』を読む

司会 甲南大学 井野瀬 久美恵
京都大学 大浦 康介

★懇親会 (18:00～20:00)

会場 レストラン「プリアール」

【研究発表】

Armadaie における語りの特異性とジェンダー・イデオロギー

東京大学大学院 大橋 千暁

ウィルキー・コリンズ (Wilkie Collins, 1824-89) の長編小説 *Armadaie* は、1864 年から 66 年まで 20 回に及び *Cornhill Magazine* に連載された。同時代の煽情小説に倣い、当時の中流・上流社会層と犯罪を結びつけ出版直後から批評家より糾弾を受けたが、それは主として作品の女性性の表象に向けられた。重婚、殺人を画策するアンチ・ヒロインの Lydia Gwilt を作品の中核に位置づけつつ、コリンズは巧妙な心理描写を通じて彼女の人物像に奥行きを与えている。Lydia の死によって作品は逸脱者を形式的に罰するが、同時にコリンズは書簡や日記などの媒体を作品中に多分に盛り込み、錯綜とした物語構造を敷くことで彼女の陰険さと波乱に満ちた人生を多角的に描写した。本発表では *Armadaie* における複数の語り手を用いた作品の多層性を、常軌を脱した女性を懲罰する家父長イデオロギーを相対化するものとして吟味し、物語がヴィクトリア朝の倫理・ジェンダー規範が齎す制約の中で自己改革の可能性を巡って葛藤する女性の内面性を如何に描き出しているのかを概観する予定である。

聖書史観の解体——Thomas Hardy とヴィクトリア朝の文献学

立教大学大学院 唐戸 信嘉

Thomas Hardy のキリスト教教義への懐疑は若年期に始まっているが、キリスト教史およびイエスに対する彼の歴史的関心はその後何十年も失われることはなかった。Hardy のキリスト教観を考察する上で重要な一翼を担うのは、19 世紀において従来の神学解体の大きな原動力となった聖書文献学である。その具体的な成果として David Strauss、Ernest Renan、Edward Clodd によるイエス伝があり、Hardy の、とりわけ 1890 年代以降の言説に見られるキリスト教批判はこれら文献学的研究を踏まえている。特に、エルサレムに代わる西欧文化の祖国のひとつとしてギリシアを措定し、両者を対比する図式は紛れもなく文献学的発想である。本発表は Hardy によるヴィクトリア朝期の文献学の受容を、彼の後期作品 *Tess of the D'Urbervilles* (1891) および *Jude the Obscure* (1895) を軸に検討する。

1850 年代における “sensation” ——*Blackwood's Edinburgh Magazine* の記事を通して

関西外国語大学 橋野 朋子

センセーション小説は 1860 年代初頭のヴィクトリア朝イギリスにおいてにわかに流行し、その流行は当時の多くの雑誌記事において大いに議論され批判された。“sensation novel (fiction)” という用語自体は 1860 年頃から雑誌記事に見受けられるようになるのだが、1850 年代の雑誌記事に目を向けると、“sensation” という言葉がすでにトピカルな言葉として扱われていたことが見えてくる。E. S. Dallas は、センセーション小説の流行を引き起こした Wilkie Collins の *The Woman in White* (1859-1860) が連載されるよりも半年ほど前に、*Blackwood's Edinburgh Magazine* の記事において “We should fly thought: We should cultivate sensation.” と述べている。また、1856 年、Margaret Oliphant は同誌において Collins の初期の代表作 *Basin* に触れて、“The ‘sensation’ which it is the design of Mr Wilkie Collins...” と引用符を用いて使用している。本発表は、主として *Blackwood's Edinburgh Magazine* の 1850 年代の記事を通して、“sensation” という言葉が 1860 年代初頭のセンセーション小説の流行のはるか前から様々な領域においていかに社会的に注目されていたかを検証していく。

John Ruskin のエコロジー思想——『19 世紀の嵐雲』を読む

日本女子大学大学院 花角 聡美

本発表では John Ruskin (1819-1900) の *The Storm-Cloud of the Nineteenth Century* (1884) に見られるエコロジー思想の再評価を試みる。この講演において Ruskin はロンドンの大気が黒く汚れつつある現象を「時代の特徴」であるとして警鐘を鳴らしている。これは近代人のモラルの低下——工業化による機械への安易な依存——が招いた事態であり、回心によって清らかな大気が取り戻せると彼は言う。当時の Ruskin は精神分裂の徴候を示していたため、黒く汚れた雲の現象の指摘とその黙示録的警告は彼の幻覚・妄想として概ね黙殺

された。しかしその主張は鋭い観察眼による長年の記録に裏付けられており、根拠のないものではなかった。公開書簡 *Fors Clavigera* (1874-84) での同種の問題への考察、また特異な農村コミュニティ *The Guild of St George* の構想と重ね合わせて、*The Storm-Cloud* の主張の今日的意義を明らかにしたい。

19 世紀後半イギリスの大辞書・大事典の世界——南方熊楠を切り口として

京都外国語大学 (非) 志村 真幸

明治～昭和初期に民俗学者・植物学者として活躍した南方熊楠は、英語でも多数の論考を書いており、イギリスの雑誌『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌や『ネイチャー』誌に約 400 本を投稿している。外国人である熊楠がイギリスの学問世界に参入できたのは、当時のイギリスで知識や情報を一元的に収集・整理するシステムがつくられており、熊楠も日本・中国のフォークロア、古典文献、言語等の情報提供者として機能したためであった。さらに『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌といった雑誌で集められた情報や人材は『オックスフォード英語大辞典』、『イギリス人名事典』、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』などの編纂に利用された。本報告では、熊楠という切り口から、当時のイギリスの知識人世界と、そのなかで生み出された大辞書・大事典について明らかにすることを旨とする。

自転車向けロードブックと自転車旅行記の出現と発展

奈良大学 (非) 坂元 正樹

自転車が普及し、自転車で旅行を行うことが一般的な行為となったのは、空気入りタイヤを備えた safety bicycles が登場した後の 1890 年代半ば以降のことであるが、それ以前の、前輪の大きなオーディナリ型自転車や各種の三輪自転車が自転車の主流であった 1880 年代前後の時期においても、自転車によって旅行する人々は徐々に増えていった。それに伴い、自転車向けのガイドブックやロードブック、そして自転車旅行記の出版が見られるようになってくる。

本発表では、まず、自転車登場以前から存在していた、馬車もしくは鉄道での旅行に用いられていたロードブックと、自転車向けのものとの比較し、その特徴を指摘する。次に、自転車旅行記の出版状況を概観して、ジャンルとしての発展状況を示し、Elizabeth and Joseph Pennell によるものなどいくつかの主要な著作を取り上げながら、その年代的变化について明らかにしていく。

【シンポジウム】

海の歴史とヴィクトリア時代

「海の歴史のルネサンス」

京都大学 金澤 周作

「海とともに生きる」

大阪経済大学 坂本優一郎

「海を飼いならす」

日本学術振興会特別研究員 石橋 悠人

「Maritime Britain の個性——近世イベリア史の視点から」

京都大学 合田 昌史

ヴィクトリア時代のイギリスの歴史や文学を考えると、そこに「海」は適切に組み込まれているだろうか。漠然と強大な海軍や活発な海運、賑やかな海浜リゾートを想起することはあっても、当時のイギリスを構成した maritime な要素を整理し、体系的に把握する試みはなされていないのではないだろうか。本シンポジウムでは、ヨーロッパ北辺の島国ゆえに独特であった近代のイギリスと海——北海・バルト海、英仏海峡、地中海、大西洋、インド洋、太平洋——の関係を考えるための土台を提示してみたい。それは、近く刊行予定の金澤周作編『海の歴史・入門——比較と関係の中のイギリス近世・近代』（仮題、昭和堂）の内容に即した歴史学的な知見であるが、文学をはじめとする隣接諸科学との対話を通して、「海」という切り口の可能性をともに広げていけたらと考えている。

【特別講演】

ヴィクトリア時代と《猥褻》の概念——『わが秘密の生涯』を読む

京都大学 大浦 康介

『わが秘密の生涯』 *My Secret Life* (1890年頃、作者不詳) は、イギリスの一ジェントルマンによる比類ない性の記録であると同時に、ヴィクトリア時代のイギリス社会を知るうえでの第一級の資料である。そこからは、当時の性風俗はもちろん、上層中流階級の家内事情や結婚・相続問題、衛生観念、性差や階級についての意識、貧困の諸相などが特異なプリズムをとおして浮かび上がる。まさに性をとおして見たヴィクトリア社会の一断面にほかならない。『わが秘密の生涯』をはじめ本格的に紹介したのは、周知のようにスティーヴン・マーカスである(『もう一つのヴィクトリア時代』1966)。一方、ミシェル・フーコーは、西洋近代におけるセクシュアリティをめぐる言説のあり方を論じるなかで、この作品について示唆に富む指摘を行っている(『性の歴史 I・知への意志』1976)。本講演では、彼らの議論も踏まえながら、『わが秘密の生涯』に見られる「秘匿と暴露のドラマツルギー」に着目し、公共圏と親密圏や、「猥褻」概念の成立、さらには私的エクリチュール(日記、手記、回想記)や〈告白〉伝統とのかかわりにおいて、この作品の読解を試みたい。

駿河台記念館へのアクセスガイド



- JR 中央・総武線 御茶ノ水駅下車、徒歩 3 分
 - 東京メトロ丸の内線 御茶ノ水駅下車、徒歩 6 分
 - 東京メトロ千代田線 新御茶ノ水駅下車 (B1 出口)、徒歩 3 分
 - 都営地下鉄新宿線 小川町駅下車 (B5 出口)、徒歩 5 分
- (http://www.chuo-u.ac.jp/chuo-u/access/access_surugadai_j.html より作成)

日本ヴィクトリア朝文化研究学会
(The Victorian Studies Society of Japan)

事務局：〒 658-8501 兵庫県神戸市東灘区岡本 8-9-1
甲南大学文学部 井野瀬久美恵研究室
Tel: 078-431-4341/Fax: 078-435-2578
E-mail: victoria@center.konan-u.ac.jp